【編集後記】

人は、戦争を思い出す度に、戦争はもう御免と言ってきた。なのに、またぞろ戦争の道を歩き出す。昔、平和のためにと戦争は始まった。そして無数の命が血の川を流れた。悪魔は年老いている。いつも微笑んでやってくる。だれかが言った。騙されるのも罪のうち。いつかまた死ぬ目にあっても、それは自業自得というもの。

成長戦略という資本家優先。排外主義と国家主義。消費税と秘密保護法。その他あれやこれや。そのような政策を採る人々を政権に仰ぐ国民。「だからこそ」差別が頻発するのだ。その実態は岡田論文を見られたい。政治と差別の間にどれほど複雑な要因が介在しようと、歴史の非理性と人間の自己疎外の因果関係は、必然である。

本誌20号をお届けする。一方で、部落差別と解放運動をめぐる諸論文、他方で、それぞれの形で社会構造の周縁にある人々（未受診妊産婦、障害者、ハンセン病患者、在日外国人）の問題をめぐる諸論文を収めた。学術論文はすべて厳格な査読をした上で収めた。構造の亀裂と精神の崩壊。亀裂を埋め、崩壊を止める知の闘い。歴史（の省察）もそこへ収斂する。諸問題を、歴史と社会が「いま・ここ」に顕現する姿として読む。そのような懐の深い諸論文の読み方が必要ではないだろうか。

この20年、激変する時代の中で、本誌は、部落問題を軸に、構造の亀裂を埋め、精神の崩壊を止める知の闘いに奮闘してきた。そこには充実感がある。同時に、悪魔はますますしたたかになる。なにとどう闘うべきか。本誌の小歴史を回顧する時、充実感と危機感が交差する。20号を確実な前進の折り返し点とするために、編集委員会は、執筆者とともにますます奮闘したい。

〈A〉